

# 渋沢栄一と『論語』

知・徳合一、利・徳合一、および実学

平成18年5月作成

改訂20年4月版

中央大学商学部・有賀裕二

Prof. Dr. Yuji Aruka

# 出典

- 本スライドは有賀が主として以下の文献からの引用を適当に編集したものである。
  - **加地xx頁**は加地伸行著『すらすら読める論語』講談社2005年からの引用を示す。
  - **論語xx頁**は加地伸行全訳注『論語』講談社学術文庫2004年
  - **渋沢xx頁**は竹内均編『渋沢栄一「論語」の読み方』三笠書房2005年からの引用を示す。
  - **自叙伝xx頁**は渋沢栄一『雨夜譚／渋沢栄一自叙伝〔抄〕』日本図書センター1997年からの引用。
- 日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一は、算盤は仁の上に置かれねばならないと誓い、生涯これを実践した。
  - 「**論語と算盤の一致**」が「**道徳と経済の合一**」説である

# ダーウィンからの引用

- 進化論のダーウィンは道徳moral senseを重要と考えていた!!
  - 人間と下等動物の間の差異すべてのなかでも、道義的な感覚あるいは良心が断然、最も重要である。 ...oughtという高度な重要性が溢れ出るような、短い強制力のある言葉に要約されている。一瞬のためらいもなく彼を同胞の生命のために身を危険にさらそうとすること；あるいは、当然なされるべき熟考の後に、ただ権利あるいは義務の深い心情に駆り立てられて、ある偉大な大義のために身を犠牲にすることこそ、人間のすべての特質の中で最も気高いものである。
  - Hauser, M.D.(2006), Moral Minds : The Nature of Right and Wrong, Eco Press; Harper Perennial, London, 528pp.の冒頭見開きページより引用。

# 道徳の形成

- 殷墟 酒池肉林
  - 池を酒で満たし、林に肉をつるすという豪勢な酒宴
  - 殷の文化では酒と肉料理の割合で酒の量が肉の量を越えるほどであったと言われ、これが滅亡につながった。
  - 殷を滅ぼした周は酒に耽溺することを戒めたという。
- 春秋時代 道徳の形成



- 以上Newton2007年12月号「殷墟の研究でみえてきた古代王朝の素顔」101頁より引用

# 三浦梅園の『價原』

- 江戸時代の偉人：東の安藤昌益、西の三浦梅園（1723-1789）と言われる。兩人とも医者、科学者であり、権力を得ることを目指さず、人の為に尽くした。ただし、安藤昌益は農本主義であり、三浦梅園のように近代経済システムにたいする理解はなかった。
- アダム・スミスと同時代に、スミスと独立に、梅園は経済学の著書『價原』を著し、労賃が需給調整によって変動することを明らかにした。また、無尽運動を育成、現代の信用組合の素を組織化した。
- 「水火木金土穀、これを六府と云ひ、正徳、利用、厚生これを三事と云ふ。後世の治、千術萬法有りといへども、此六府三事に出でず。」（『價原』）
  - 漢学の伝統に下に、経済活動は、正徳、利用、厚生これを三事に関連づけてこそはじめて人の世の為になることを説いた。貨幣の利用についても言及される。

# 梅園の経済思想

- 梅園は『價原』で次の三つのことを強調した。
- (1) 豊かさはお金ではなく、水火木金土穀の資源（民用）にあること。また民が豊かであること（民富）が国富であること。
- (2) したがって為政者は民富につとめなければならず、富を自分の手元に吸い寄せようとする商人の術、すなわち乾没の手法を用いてはならないこと。国や天下を治める方法は、いつも経世済民的方法でなければならぬこと。
- (3) その上で廉恥（れんち）礼讓の風（ふう）を興すこと。
  
- 廉とは欲がないこと、利を人に推おすこと。礼讓とは人に譲ること。
- これは争奪とは反対の態度である。人に譲るとは、目上の人に譲る、弱者に譲る、自分よりもふさわしい人に譲ることである。そのためには衣食が足りなければならない。梅園は**礼楽制度**を作らねばならぬと言っているが、この制度は恥の感覚と譲るといふ精神の二つを根幹とする。
  - 以上、小川晴久著（東京大学名誉教授）「三浦梅園の経済思想の現代的意義」、『高崎経済大学論集』vol.43(2),2000, 57-59頁からの引用

# 道徳と経済の調和：大原幽学

- 商品経済の発展は、勝者にも敗者にも道徳的墮落を生み出すのである。というわけで、商品経済が浸透し始めると、どうしても**道徳と経済の調和**という課題が発生する。
  - 博打、諸勝負、女郎買い、大酒等14箇条の身分不相応のおごりを禁止した。
- 道徳と経済の調和を達成するのに、明治期の渋沢栄一は商業倫理に儒教を活用したが、江戸時代の**大原幽学**(1797-1858)は農民改革運動に儒教を活用した。
  - **幽学**は尾張藩重臣大道寺家の出身と言われるが、18歳のとき勤当となり、諸国を遍歴したという。
- **幽学**は道徳と経済の調和を基本とした「性学」（人の本性に適う学）を説き、天保6年（1835年）長部村名主の依頼を受け千葉県香取郡に居を構え道徳実践を行った。後にいわゆる『天保水滸伝』と言われる稗史を残した。
  - 「門人達は道友（どうゆう）と呼ばれ、性学道友の農民を指導し農村の復興を図り、農業協同組合である先祖株組合をはじめとして農民が協力しあって自活できるように各種の実践仕法を行って成果」をあげた。
  - 大原幽学記念館<http://www.city.asahi.chiba.jp/yugaku/index.html>

# 企業のフィランソロフィー

- 大原孫三郎は明治・大正期における企業のフィランソロフィーの先駆者。企業の社会的責任CSRを実践したパイオニアである。
  - 大原は倉敷紡績の創業家の出身
    - 大原孫三郎人物伝（クラボウHP）
    - <http://www.kurabo.co.jp/sogyo/>
- Philanthorophy
  - Phil 愛する。
  - Anthrophy 人類に関すること。
- 哲学PhilosophyとはSophiaを愛すること。

# 金融優先社会の悲劇

- 04/23/2008 03:01 PM
- DEADLY GREED
- The Role of Speculators in the Global Food Crisis
- By Beat Balzli and Frank Hornig
- Vast amounts of money are flooding the world's commodities markets, driving up prices of staple foods like wheat and rice. Biofuels and droughts can't fully explain the recent food crisis -- hedge funds and small investors bear some responsibility for global hunger.
- SPIEGEL ONLINE - (ドイツで最も権威ある週刊誌)  
<http://www.spiegel.de/international/world/0,1518,druck-549187,00.html>

# 安藤昌益 (1703-1764)

- 東北地方において、宝暦の飢饉と金利貸資本の支配のなかで、多くの人々が死んでいくのを見た。
  - 「直耕とは食衣の名なり。食衣は直耕の名なり。故に転定、人、物は食衣の一道に尽極す。其の外に道と云こと絶無なり。故に道とは直耕、食衣のことなり。」『自然直営道』
- 「安藤昌益は、金銀通貨と文字・学問による収奪が行われている世を根底から批判した思想家」、「人々が宝と珍重する金銀貨幣は、他から奪い取ったものであり、学問をする目的は、自らの欲望を満たし、安楽な生活をするところにある」、「人間にとって最も大切なものは、金銀でもなく学問でもなく、命をつなぐ食である」
- 古藤友子「安藤昌益－収奪の世から自然の世へ」、小川晴久編『実心実学の発見』より

# 道德と仁

# 道徳の進化はあるか？

- 世の中のことは何事にも進化があって、宇宙も進化し、生物も進化し、森羅万象みな進化のあとが見られるが、**ただ道徳だけでは**二千五百年前の孔子の時代でも、そのまた二千五百年前の堯・舜の時代でも、五千年後の現代でもまったく同じで、進化するどころか、かえって退化したようだ。ことに**国際道徳**にいたっては**退歩**もはなはだしい。
  - **渋沢150頁**

# 道徳の本質

- 子は四を以って教う。すなわち、文・徳・忠・信。
  - 論語・述而第7の24(160頁)
  - 老先生は、四部門に基づいて教育された。すなわち、**文芸**（学問知識）・**徳行**・（他者への）**誠意**・**信義**（言行の一致）である。

加地160頁の注	自己に対して	他者にたいして
形式	学問知識（文）	真心の表現（忠）
内容	道徳修養（行）	真心の実質化（信）

# 人の執着心の克己、そして仁

- 克・伐・怨・欲行われざるを以て仁と為す可きか、と。子曰く、以て難しと為す可し。仁は則ち吾知らざるなり、と。
  - 論語・憲問第14の1(316頁)
  - 「勝ちたがり、自慢する、恨む、欲深、こういうことをしなければ、人の道を踏んだことになりませんか」。老先生「[その四者を実行するのは] 難しい。[仮にできたとしても] それで人の道を踏んだことになるのかなあ」。
  - 道德とは仁の実践にほかならないが、孔子も指摘するように仁の実践は大変むずかしい。となると、われわれのような徳無き者はただ善を望むだけである。
    - 不徳の者は仁を為せず。唯だ善を為す、と。

# 理想とする人間像

- 子曰く、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ。
  - 論語・述而第7の6（146頁）；渋沢183頁
- 顔淵曰く、願わくは、善に伐ることなく、労に施すことなげんと。子路曰く、子の志を聞かんと。子曰く、老者はこれを安んじ、朋友はこれを信じ、少者はこれを懐けんと。
  - 論語・公治長第5の26（119頁）；渋沢146頁
  - 日本では陰徳を積むことを最上とし、自己の責任だけでなく、他人の債務でも引き受けるのが武士道の本意である。
  - 渋沢148頁

# 陰徳

- 子曰く、泰白はそれ至徳と謂うべきのみ。三たび天下を以て譲る。民得て称することなし。
  - 論語・泰白第8の1（172頁）
- 西洋道德の大本は福音書マタイ伝の中に「人は自分で善事をするとともに、よいことはなるべく他人に勧めて行わせるのが人の務めである」ということから来ている。
- これに反して東洋道德の大本は「己の欲せざる所は人に施す勿れ」（論語・顔淵第12の2；衛靈公第15の24）というところにある。渋沢216-217頁
  - 前頁の注。日本では陰徳を積むことを最上とする。
  - 渋沢148頁

# 儒教と道徳

- 儒教は礼、楽を重んじる生き方を正しい道とする。
- 「子曰く、詩に興り、礼に立ち、楽に成る」
  - 論語・泰伯第8の8（179頁）
  - 老先生の教え。『詩経』の朗誦から始まり、礼法を基盤として立ち、音楽の調和に従って均衡のとれた生き方、ありかたを完成する。
- 墨家（墨子を師とする集団）は社会的生産力を重要視していたため、孔子直後の時代から活発に儒教批判を展開した。墨子は孔子のすべてを批判したのではない。道徳の部分はちゃんと受け入れている。

# 現代への適応と補完

有賀裕二、異質的相互作用エージェントの功利主義とモラル・サイエンスの進化、西川潤他編『社会科学を再構築する』明石書店、2007、464－482を参照。

# 日本における儒教への適応

- 儒は祈禱を意味する。
  - 儒教は本来、葬祭を含む宗教である。
- 日本人の多くは儒教を宗教として考えず、「道德」を分離して永らく受け入れてきた。
  - つまり、日本人は論語のなかに普遍的な道德があると考えていた。
- また、日本人は論語における主張の優先順序を逆転している。つまり、十七箇条憲法では「一曰。以和為貴（和を以って貴しと為す）」が確立された。
  - これは和合の道を守ることがもっとも重要であることを意味する。「以和為貴」は論語の以下の節を転用して導いたものと言われている。
  - 「有子曰く、礼の用は和をもて貴しと為す。」 [礼式・作法の実行においては堅苦しくならずなごやかであることが大切である。] の転用である。
    - 論語・学而・第11の12 (28頁)

# 渋沢における現代への適応

- 儒家
  - 儒家は父子、兄弟、君臣のような「人倫関係とその序列」をもっとも大事にする（本田1978, 21）。
- 墨家
  - 墨家はこれらを否定するものではないが、墨家はこれらを含む「七種の相互作用」、つまり、社会生産力を含むマクロ的全体を観る。
  - 人倫関係を重視するか否かで「儒墨」の区分が可能である。とはいえ、儒教の現代的応用を考えるならマクロ的全体を軽視することはできない。
  - したがって、渋沢が社会的生産力の重要性を認識するとき、「墨子の思想」を援用しなくても、墨子の観点を排除するわけにはいかないのである。

# 儒教の現代的適応と補完的論点

- 渋沢はさまざまな社会システムデザイン的设计者であったからこそ**墨子の観点**を一番よく知っていたはずである。
- 儒教が一番拘る「**親親主義**」だけでは一般公衆の福祉の改善は可能でない。親族を超える**impartial caring**、つまり**兼愛**というアイディアがないと資本主義経済の厚生改善はありえないはずである。
- **兼愛**はほかならぬ墨家のトレードマークである。

# 墨子の交相利

- ところで、墨家初期の「**拒利の思想**」は単に私利の否定を意味したが、「**交相利の導入**」が図られると、兼愛の意味は新たな様相を呈する。「交相利」の段階では、利は他利に限定される。

「交相（こもごもあい）利す」とは、直接的な利益の交換を指すのではなく、兼愛の精神により、他者を犠牲にしての自利獲得を停止し、そうした手段によって最終的に得られる天下の大利、つまり、全世界の安寧回復を、万人がともに享受しようとする意味[である。](浅野裕『墨子』講談社学術文庫1998,p. 59)

- この文意を短絡的に「最大多数の最大幸福」と結びつけて「功利主義思想の原型」の一つとして評価する人々がいるようである。しかし、功利主義思想も実は「多義性」から免れない思想である。正統派経済学のように「個人合理性の脈絡」で功利主義と接続することもできるし、「**他者を気遣う脈絡**」で功利主義と接続することができる。功利主義思想が多義性を持つ以上、墨家の思想評価で功利主義を強調することは適切でない。

# 道徳律としての兼愛・交相利

- **兼愛**、すなわち、他者を気遣う相互作用エージェントの論理に関心がある以上、当然、孔子および儒家の「**親親関係**」を超えざるを得ない。この意味で、「異質的相互作用エージェントの枠組み」が古代中国の墨家思想に見出される。
- 実際、墨家の思想にはつぎのような異質的相互作用エージェントの枠組みが埋め込まれている。
  - **異質的エージェントの存在** 機能別に分布する異質的エージェントが存在する。すなわち、七種の関係あるいは相互作用の存在。
  - **サブグループごとの分布** 異質的エージェントはクラスター単位で存在する。すなわち、そのサブグループ「単位内では利害が完全に一致していて、他の同類ないしは反対概念としての単位の間には、利害が対立している。」
  - **互換可能性** クラスター間で利益の交換が可能である。すなわち、交相利。
- 異質的相互作用エージェントの枠組みは道徳律として兼愛・交相利を基礎とすることができる。

# 道德・経済合一説

# 企業の社会的責任と論語

- EUの強い働きかけにより、すでに日本経済団体連合も企業の社会的責任CSR: Corporate Social Responsibilityの規格化に乗り出した。こうした背景の下で、渋沢栄一の「**道徳・経済合一の説**」は再び脚光を浴びている。彼の「**道徳・経済合一の説**」とは、**アルフレッド・マーシャルの経済騎士道**とは異なり、**漢学**、とりわけ『**論語**』に根ざしたものである。
- 渋沢によれば、「**論語**は二千四百年以前の古い教訓であるが、吾々の処世上最も尊む可き実践道徳であり、また実業家の金科玉条となすべき教訓も沢山にある。それで私は実業界に身を投ずるに当って、論語の教えに従って商工業に従事し、**知行合一主義**を実行する決心を断言しその後五十年間最初の決心を食言せず実行して来た積もりである。」
  - **自叙伝218頁**

# 実業の在り方とは

- 金儲けのために役人をやめるのではない。実業家が現在のように卑屈で世間の尊敬を受けないのは、一つは封建の残った弊害であろうが、一つは商人のやり方がよろしくないからである。欧米ではけっしてこうではない。不肖ながらこの悪習を改めるために骨を折りたい。
- 宋の趙普は『論語』の半部で天子を輔け、半部で身を修めたといっているが、私は『論語』の半部で身を修め、半部で実業界を矯正したい。先を見ていてくれ。それ以来、一身の行動でも事業を経営するにも、必ず『論語』の教えに従って決断を下した。
  - 28-29頁

# 実業と虚業

- 子貢曰く、如し博く民に施して能く衆を濟う有らば、如何。仁と謂うべきか、と。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。論語・雍也第6の30（141頁）

- 『論語』の[雍也篇]に孔子は、広く民に施して大衆をすくう者ならば、これは仁以上の仁で、聖人と称すべきだと言っている。
- 徳川将軍二代の頃、この時代の富豪はもっぱら大名に金を貸して利息を取るのが商売で、これにより利益を得ていたが、三井宗寿は富豪が金貸しばかりをして世を渡るのはよくない、実業をしなければ真の社会奉仕ではないと考えて、呉服店を開業したそうである。渋沢91頁

# 不義にして富みかつ貴きは我において浮雲のごとし（論語・述而第7の15）

- 真の富貴を得る方法は、知識を学び技術を修得するのと同じである。調査もせず研究もせず頭を十分に働かせなかったら、とても真の富貴は得られない。不義や無理やごまかしで、あるいは何かの僥倖で一時的富貴を得ることがあったとしても、それは浮雲のようなもので、たちまち一陣の風で吹き散らされてしまう。
- 私が理化学研究所の設立に骨を折ったのは、個人を富ますにも国家を富ますにも、原理原則に即し、たゆまない努力の継続によってはじめてそれを得る道が発見できると考えたからである。
- **渋沢194-195頁**

# 株の売買の真義

- 利益があがるようにして事業を起こし、事業を盛んにする計画をたてなければならないが、事業は必ず利益をとまなうものとは限らない。
- **利益本位で事業を起こし、これに関与し、その株を持ったりすれば、利益のあがらない会社の株は、これを売り逃げしてしまうようになって、結局必要な事業を盛んにすることも何もできなくなるものである。**
- だから私は国家に必要な事業は利益のいかんを問わず、**道義に従って起こすべき事業**ならばこれを起こしその株を持ち、実際に利益をあげるようにして、その事業を経営していくべきだと思っている。私は常にこの精神で種々の事業を起こしこれに関与し、またはその株を持っているので、この株は上がるであろうからと考えて、株を持ったことは一度たりとてない。
  - 渋沢105-6頁；自叙伝の「株式取引所の創立と私の態度」265-269頁

# 投機にたいする渋沢の信条

- 私は取引所の必要を認め、その発達のためには及ばずながら微力を尽くしたのであるが、私自身はその事業には携わらなかったのみならず、投機に類似した事にも一切手を出さなかった。
- ・ ・ ・ 私自身も鉄道債券を買い込んで置けば大いに儲けることが出来たのであるけれども、私自身では只一枚の鉄道債券も買わなかった。
- ・ ・ ・ 私の信条からすれば、如何に確実な債券であるにしても、将来騰貴するのを予想してこれを買込み、その騰貴に依って儲けたのでは結局投機に依って金儲けした事になり、絶対に投機には手を染めぬという私の信念を傷つけるに到るからである。
- 殊に私は他人の金銭を預かって居る銀行事業に関係し頗る重大な責任を担っている身を以て、投機に関係するが如き事あつては、自然世間の信任に背きまた自分の職責を完うする事が出来ない。

- 自叙伝268頁

# 渋沢栄一の道徳・経済合一説

- 算盤をとって富を図るのはけっして悪いことではないが、算盤の基礎を仁義の上においていなければいけない。私は明治六年に役人をやめて、民間で実業に従事してから五十年、この信念はいささかも変わらない。
- あたかもマホメットが片手に剣、片手に経典を振りかざして世界に臨んだように、片手に『論語』、片手に算盤を振りかざして今日に及んでいる。
  - 渋沢92頁

# 利徳合一へ至る「義利合一」論

- 渋沢の利徳合一論の背景には、山田方谷（備中松山藩の執政）の右腕として活躍した三島中州（二松学舎大学の創設者）の「義利合一」論があったと言われる。山田方谷→三島中州→渋沢栄一の系譜がある。
- **義利合一論**：君子は利益を賤しむのではなく、義に則った利益の得方・使い方が出来なければならない。
- 山田方谷は陽明学者と言われる。彼は、朱子学に基づく幕藩体制が義に適った利を否定することに疑問を持った。

# 陽明学への注

- **貝原益軒**（1630-1714；70歳になるまで益軒ではなく**損軒**と名乗った）は精神・肉体の衛生を保つため生活する上で心得ておくべきことを具体的に平易に説いた『養生訓』の著者として歴史上著名である。
- 益軒は、はじめ陽明学を学んだが36歳のとき『学蔀通弁』を読んで陽明学の非を悟り、程朱の学（朱子学）に転じたと言われる。
- 一方、**山田方谷**は陽明学者と言われる。以下、山田方谷との関連で陽明学にたいする通説を紹介する。
- 「朱子学の利点は、初心者でも学問の順を追って学べば深く学ぶことができる。しかし、我が心が得心しているかは問わない。一方、陽明学の利点は、我が心が得心しているのかを問うて人間性の本質に迫ることができ、道理を正しく判別でき、事業においては成果を出すことができる。しかし、私欲にかられた心で行為に走ると道理の判断を誤る。方谷は弟子達から陽明学の教えを請われても朱子学を深く学ぶことを諭した。これは、己の心のままに行為に走ってしまいやすい陽明学の欠点を熟知していたことによる。」（Wikipedia 日本語版「山田方谷」より要約引用）

# 儒教成立と徳化政治

# 儒教の背景。多神教と一神教

- **一神教**

- 一神教においては、まず全知全能にして唯一絶対の神が存在し、その被造物として万物が存在する。

- **多神教**

- これに対して、**多神教**においては、誰が想像したものでもない<渾沌>がまず存在し、時間が経つにつれて、軽重、濃淡等によって<もの>に分化し、この世ならびに万物ができたとする。

- 加地84頁

# 東北アジアの社会背景

- 東北アジア（中国、朝鮮半島、日本）＝多神教地帯
  - 多神教＝人間側の都合によって効き目のある神を取捨選択できる。→人間中心の社会、政治上位・宗教下位の社会→政（まつりごと）がもっとも重要になる。
  - 一神教社会＝キリスト教が王たちを支配する「宗教上位・政治下位」。フランス革命の目的は政治のキリスト教からの脱却。
    - 加地86頁

# 政と為政者への道

- 多神教社会では、政治は<他者のための幸福論>として存在意義を持つ。
- 「孔子のころ、他者のための幸福論を求めた者は、政治への道、すなわち、為政者への道を歩むことが最も具体的に最も現実的であった。」 **加地85頁**
- 「東北アジアでは、政治が最も優先されたがゆえに、その頂点にある天子の下にすべてがあった。」 **加地85頁**→君（天子）と為政者（士）

# 孔子の出自

- 孔子は紀元前551-前479の人。
  - 魯の国に生まれ魯の司寇（刑罰および警察の長）になったが辞し、門人を引連れ諸国を歴訪、**仁**を理想とする**徳治政治**を説いた。
- 当時の社会は士農工商の社会。ただし、流動的で、志と才能と機会があれば、農民から士になることができた。
  - 孔子の父は魯へ亡命した貴族で、孔子は父70歳母15歳のときの子という説があり、3歳のとき父と死別、結局、農民の暮らしをしていたと思われる。母は儒（祈祷師集団）出身で社会的な差別を受けた階層であるが、反面、文字を知っていた。これが孔子の教育に大きな影響を与える。加地79頁
- 孔子は農民から太夫（士の上位者）になった。
  - 英語で孔夫子はConfucius。論語はAnalects。
  - 孔**Con**+夫子（君子のこと）**fucius** → **Confucius**

# 王道による徳化政治

- 力だけで統治するのでは民心を得ることができない。王道による徳化政治とは平和的統治の理論である。
  - **加地78頁**
  - 最高の有徳者に天が政権を与えるとする。
  - この有徳者が周囲の者を感化し、文化し、教化し、徳化してゆくことを理想とする。
- このような社会で、**他者の幸福のためという志**をたてるとき、**士となり行政を担当すること**→**為政者への道**が開ける。

# 君子之徳風

- 季康子、政を孔子に問いて曰く、如し無道を殺して、以て有道を就さば、如何、と。孔子対えて曰く、子政を為すに、焉んぞ殺を用いん。子善を欲すれば、民善なり。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を上うれば、必ず偃す、と。

- **論語・顔淵第12の19 (284頁)**

- たとい無道な連中とはいえどうして殺すなどいたしますのか。貴台が良き生き方を願われますならば、人々もそうなります。
- 為政者の品位（身分）は風のようなもの。

# 孔子の政治倫理

- 国を有ち家を有つ者は寡きを患えずして、安からざるを患う、と。蓋し均しければ貧しきこと無く、和すれば寡なきこと無く、安ければ傾くこと無し。夫れ是の如きが故に、遠人服さざれば、則ち文徳を脩めて、以て之を来たす。既に之を来たせば、則ち之を安んず。
  - 論語・季氏第16の1 (376頁)

# 孔子の政策観

- 子貢政を問う。子曰く、食を足らし、兵を足らし、民之を信ず、と。子貢曰く、必ず己むを得ずして去らば、斯の三者に於いて、何をか先にせん、と。曰く、兵を去らん、と。子貢曰く、必ず己むを得ずして去らば、斯の二者に於いて、何をか先にせん、と。曰く、食を去らん。古自り皆死有り。民信ずる無くんば、立たず。
  - **論語・顔淵第12の7（275頁）；加地69-70頁**

# 政と道徳の必要性

- 子曰く、之を道（導）くに政を以てし、之を斉うるに刑を以てすれば、民免れて恥無し。之を道（導）くに徳を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、恥有りて且つ格（正）し。
  - **論語・為政第2の3（36頁）**
- 老先生の教え。行政を法制のみに依ったり、治安に刑罰のみを用いたりするのでは、民はその法制や刑罰にひっかかりさえしなければ何をしてでも大丈夫だとして、そのように振る舞ってなんの恥ずるところもない。しかし、その逆に、行政を道徳に基づき、治安に世の規範（礼）を第一とすれば、心から不善を恥じて正しくなる。
  - **加地59頁**

# 君子と小人

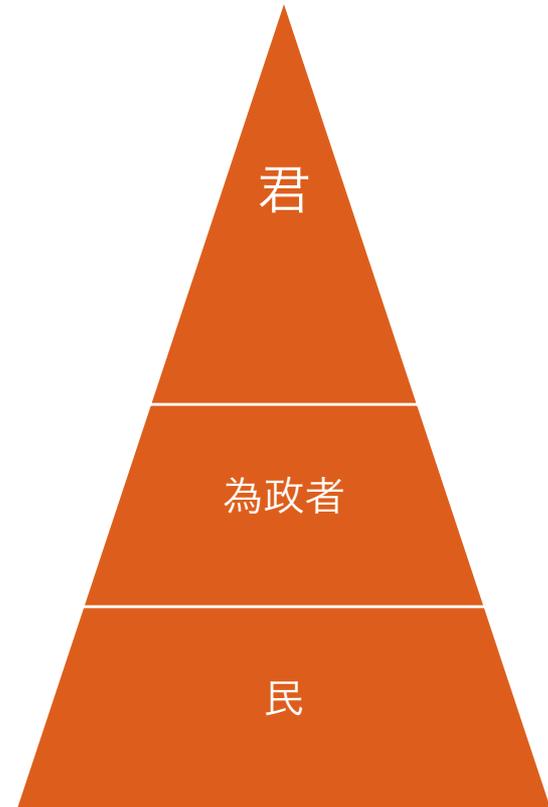
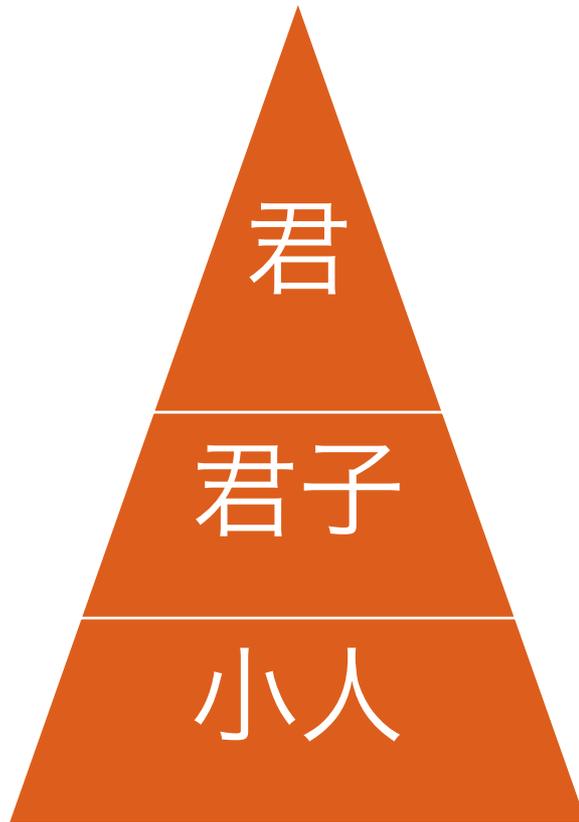
# 士とは？

- 弁護士、会計士、税理士にはみな「士」がついているが・・・
- 他者の幸福を考えること→仁
- 士＝他者の幸福を考える志のある者。
- 民＝自分の幸福をのみ求める者。
  - 仁を實踐するものとしての士
    - 加地63頁

# 論語の主語、君子と小人

- 君子＝教養人
- 小人＝知識人
  
- 士＝他者の幸福を考える者、志のある者。
- 民＝自分の幸福をのみ求める者。
  - 加地63頁
  
- 為政者→士となるべき
  - 加地伸行著『すらすら読める論語』講談社2005年の136頁；論語・注1. 130-131頁より引用

# 君子と為政者



# 君子周而不比

- 君子は周して比せず、小人は比して周うせず。
  - **論語・為政第2の14（44頁）**
  - 君子は忠実、信実をもって国家に利益をもたらし、小人は自分たちの仲間を組んで自分たちの利益を図る。・・・小人は広く愛することができず、権力に追随し、利益を獲得するために一部の人だけ組んで、自分の利益に害のある者は憎み、善悪の判断ができない。・・・その分岐点はほんの少しの違いなのに、その害たるや千里の隔たりがある。
    - **渋沢55頁**
    - 周うは、普遍的で偏らないこと。

# 君子固窮

- 子曰く、君子固より窮す。小人は窮すれば斯ち濫る、と。
  - 論語・衛靈公第15の2 (352頁)
  - 教養人とてもとより窮することがある。ただ、知識人は追い詰められると見識がないので右往左往する。
    - 加地114 頁
- 子曰く、君子も勇有りて義無くんば、乱を為す。小人勇有りて義無くんば、盗を為す。
  - 論語・陽貨第17の20 (409頁)
  - 教養人は大義を第一とする。だから、度胸があるだけで大義が無ければ、反逆者となる。知識人とて同様に、反乱者（盗）となるだけのことです。
    - 加地115頁

# 君子喩於義

- 子曰く、君子は義に喩（さと）り、小人は利に喩る。
  - **論語・里仁第4の16（90頁）；加地116頁**
  - 教養人は道理を理解し知識人は損得を理解する。
- 色厲しくして、内荏らか、諸を小人に譬うれば、其れ猶穿窬（せんゆ）の盜のごときか。
  - **論語・陽貨第17の10（401頁）；加地118-9頁**
  - 外見（色）ばかり格好をつけ、その実、中身はだめ。これを知識人に譬えてみると、上品に構えているものの、心では利益を手に入れたいと密かに思っているこそ泥みみたいである。

# 君子上達

- 子曰く、君子は上達し、小人は下達す。
  - 論語・憲問第14の23（334頁）；加地111頁
  - 教養人は根本や全体（上）が分かる。知識人は末端や部分（下）について知っている。
- 子曰く、君子は徳を懐い、小人は土を懐う。君子は刑を懐い、小人は恵みを懐う。
  - 論語・里仁第4の11（87頁）；加地112頁
  - 教養人は善く生きたいと願うが、知識人は地位や豊かな生活の安泰（土）を願う。教養人は責任を取る（刑）覚悟をするが、知識人はお目こぼし（恵）でなんとか逃れたいと思う。

# 君子不可小知、而可大受也

- 子曰く、君子は小知す可からず。而して大受す可し。小人は大受す可からず。而して小知す可し。
- **論語・衛霊公第15の34 (370頁)**
- 老先生の教え。教養人は専門的知識が十分ではない。しかし、大任を果たすことができる。知識人は大任を果たすことができない。しかし、専門的知識については優れている。

# 克己復礼、為仁

- 己に克ちて礼に復するを、仁と為す。
  - **論語・顔淵第12の1 (269頁)**
  - 「己に克つ」とは禽獸的自由・利己主義を乗り越えること。
  - 「礼に復す」とは社会的規範（礼）にもどること。
  - 「仁」とは人間愛。
- 利己主義を乗り越え、社会的規範に基づくこと、それが真の人間愛である。
  - **加地63;141;151頁**

# 知徳合一と実学

# 儒教の実学＝実心実学

- 「実学」とは『実業の学』の意味ではなく、儒学(朱子学、陽明学)の代名詞。
- 儒学の実学
  - 「修己治人の学」
  - 「三事六府の学」、「三事」は「正徳・利用・厚生」、「六府」とは「水火金木土穀」
- いまの実用の学には「実心」がない。儒学では、
  - 「修己」が実心で、「治人」が今日言う実学。
  - 「正徳」が実心にあたり、「利用・厚生」が実学。
- このように儒学は実心実学である。
  - 小川晴久「**実心実学とは何か**」、『公共的良識人』2007年10月1日号

# 三浦梅園の実心実学(1)

- 一八世紀の三浦梅園(1723-1789)は、「実」という言葉の代わりに「誠」を使った。「誠」は「偽りなき」で「信」は「偽りを言わぬ」こと。
  - 「誠=偽りなき」は「天=自然の道」で、「植物の=有機体世界の=生態系の論理」
  - 「信」は小で、「誠」は大。
- 梅園は人間を「人道を以て人と為る」側面と「天道に順って人と成る」側面の統一であると理解。
  - 人道とは「教、学、礼、文などの人間の後天的作為」
  - 天道とは「誠であって、之に順うことで人間の中に、忠、実、真、諒が形成されていく」
- 小川晴久「**実心実学とは何か**」、『公共的良識人』2007年10月1日号

## 実心実学の発見(2)

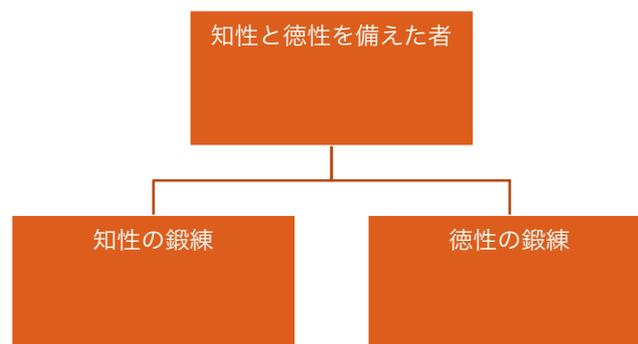
- 石田梅庵、石門心学を確立した。1695年11歳で呉服屋に丁稚奉公に出て以来、商人の立場から思想家として大成する。
  - 「学問とは心を尽くし性を知る」として心が自然と一体になり秩序をかたちづくる「性理の学」（性学）としている。
  - 「商人は直に利を取るに由て立つ。直に利を取るは商人の正直なり。利を取らざるは商人の道にあらず」『都鄙（とひ）問答』
  - 「二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなこと多かるべし」
- 小川晴久『実心実学の発見ーいま甦る江戸期の思想』より

# 知徳合一

- 儒教は、日本、韓国の近代では、朱子学、陽明学として受け継がれる。これらは新儒教 neo-Confucianismに属する。
- 陽明学は朱子学批判から登場したが、朱子学の倫理的側面を批判したのであり、全体系が否定されているわけではない。
- 「**知行合一**」（「知は行の始めにして、行は知の成なり）は陽明学では重要な命題である。朱子学では「知」が先にあって「行」が後になると教える（「**知先行後**」）。陽明学では知と行は私欲によって分断されると考える。
- 「知徳合一」はソクラテスの命題として著名である。正しい知恵を持つことは、徳を持つこと、つまり、人間においては「徳＝知恵」が成り立つ。知徳合一は、ソクラテス以前に誕生した『論語』の根幹にある。

# 知・徳の合一説

- 古の学ぶものは己の為にし、今の学ぶ者は人の為にす。
  - 論語・憲問第14の24（334頁）；加地95頁
  - 人の為。他人から名声を得るため
  - 己の為。己の道徳的充実を図る
- 知性の鍛錬
- 徳性の涵養
  - 加地128頁



# 知之為知之、不知為不知、是知也

- 之を知るは之を知ると為し、知らざるは知らずと為す、是れ知るなり。
  - **論語・為政第2の17 (46頁)**
  - 知っていることは知っているとし、知らないことは正直に知らないとする。それが真に「知る」ことである。
    - **加地214 頁；渋沢58頁**
  - 真に知るwissenこと、これが学問である。
  - ドイツ語Wissenschaft

# 仁

- 樊遲（ぼんち）仁を問う。子曰く、処に居りては恭、事を執りては敬、人に与しては忠、夷狄に之くと雖も、棄つ可からざるなり、と。
  - 論語・子路第13の19（306-7頁）
  - 樊遲が仁とは何でしょうかと質問した。老先生はこう教えられた。「日常生活においては自分を抑えて慎み深くし、仕事においては他者に対して敬意を忘れず、集団生活においてはまごころを尽くす。〔常に相あるべきであって、たとい文化の香りなき〕野蛮な地に行ってもそれをやめないことである。」
- 苟に仁に志さば、悪無きなり。
  - 論語・里仁第4の4（82頁）
  - ひたすら仁愛の道を志すならば、けっして悪を行うことはない。
  - 加地98頁
- 子曰く、仁に当たりては、師にも譲らず。
  - 論語。衛靈公第15の36(372頁)
  - 老先生の教え。道徳（人の道）の実践においては、たとい師に対してであっても一歩も譲らない。

# 学びと仁

- 難きを先にし獲るを後にす。仁と謂うべし、と。
  - 論語・雍也第6の22（136頁）
  - 仁者（人格者）とは過程を第一とし、結果は第二とする。
    - 加地97頁
- 博く学んで篤く志し、切に問うて近く思う。仁、其の中に在り。
  - 論語・子張第19の6（429頁）
  - 知識を広めて十分に記憶し（志）、発憤して問題を立てて自分の分からないことを解こうとする。人の道（仁）はその中に在る。
    - 加地98頁

# 仁者

- 唯仁者のみ能く人を好み、能く人を悪む。
  - 論語・里仁第4の3（82頁）
  - 心ある人（仁者）だけが公平であり、善人と悪人を見極める。
  - 加地99頁
- 子曰く、不仁者は以て久しく約に処らしむ可からず。以て長く楽に処らしむ可からず。仁者は仁に安んじ、知者は仁を利す。
  - 論語・里仁第4の1（81頁）
  - 老先生の教え。心なき者（不仁者）には貧しい生活を長くさせてはならない。〔きっと悪いことをするからである。〕逆にまた豊かな生活を長くさせてはならない。〔驕って墮落するからである。〕心ある者（仁者）は自分の境地（仁）のままに満足して生き、知ある者（知者）は己の境地の価値を社会に活かす。

# 実学と学問

- 子曰く、弟子入る則ち孝（きょう）し、出づる則ち弟（てい）し、謹しみて信じ、汎く衆を愛して仁に親しむ。行うて余力ある、則ち以て文を学ぶ。
  - **論語・学而第1の6（22頁）**
  - すべての人の子たる者には、入りて内にあるときは父母や年長者に孝を尽くし、出でて外にあるときは親戚先輩に敬意を失わず、大衆にも親切を尽くし、自分だけの利益をはかって人を困らせることなく、仁徳をそなえた君子人に近づいて、徳性を涵養するようにする。こうして人の道を実際に学び取るのが実学であるが、実学が自分の身にそなわっても、学問を修めなければ聖賢の教訓に暗く、物事の道理を識らず、自然に我流に陥りやすい。だから、余力があれば学芸に励むようにしたいものだ。
  - **渋沢25-26頁**

# 三省と実学

- 曾子曰く、吾日に吾身を三省す。人の為に謀りて忠ならざるか、朋友と交わりて信ならざるか、習わざるを伝えしか、と。
  - 論語・学而第1の4（20頁）
  - 曾先生の教え。私は毎日、主題を変えていろいろ反省する。誠意の主題のときは、他者のために相談にのりながら、いい加減にして置くようなことがなかったかどうか、友人とのつきあいで言葉と行いが違っていなかったかどうか、学習内容が不十分なのに相手に伝えてしまったかどうか。
    - 加地138頁
  - 三省とはセルフコントロールの工夫のことで、渋沢は毎日実践した。
  - 「人のために忠実にはかり、友人に信義を尽くし、孔子の仁道を行うならば、人からうらまれることなく、農工商の実業家は必ずその家業は繁盛するはずである。」
    - 渋沢24

# 五省Five Reflections

- 至誠に悖るなかりしか Hast thou not gone against sincerity ?
  - 言行に恥ずるなかりしか Hast thou not felt ashamed of thy words and deeds ?
  - 気力に欠くるなかりしか Hast thou not lacked vigour?
  - 努力に憾みなかりしか Hast thou not exerted all possible efforts ?
  - 不精に亘るなかりしか Hast thou not become slothful ?
- 
- 海軍兵学校（江田島）教官作。第二次大戦後に米国で英訳される。
  - 王貞治氏（プロ野球監督・国民栄誉賞）が毎日復唱している。

# 人生のあり方

# 人生のあり方

- 孔子曰く、命を知らざれば、以て君子と為る無きなり。礼を知らざれば、以て立つ無きなり、言を知らざれば、以て人を知る無きなり。

- **論語・堯曰第20の3(450頁)**

- 命。自分の与えられた運命
- 礼。社会規範
- 言を知らざる。ことばを理解できない。
- 人を知る。人間を真に理解する。
  - 加地225頁

# 克己心

- 七十にして心の欲する所に従うて、矩を踰えず。
  - 論語・為政第2の4（36頁）
  - 「私（渋沢）に克己心がなかったならば、反対論者と刺し違えて死んだかもしれない。克己心は実に偉大なる力である。」
    - 渋沢41頁
  - 自制心self-controlはヨーロッパインテリの基底にある。
  - 自制心は利己心に対立する。
- それではどうやって克己心を得るか？
  - 止観。天台智顛（中国）
  - 瞑想はアジアを起源とする。愛宮ラサール（上智大神父）

# 信と事業

- 子曰く、人にして信なきは、その可を知らざるなり。
  - **論語為政第2の22 (50頁)**
  - 信は人の行動にとって要（車を連結する輓軌）のようなものである。信がなければ、いかなる職位にある人も、いかなる事業に就く人も、世に立ってはいけない。
    - **渋沢62頁**
  - 信は義と相俟って行動に移してはじめて意味がある。

「信義に近づけば言復むべきなり。」いかに信が大切でも義にはずれたことは守ってはいけない。

# 人物鑑定法

- 子曰く、その以（用）うる所を視、その由る所を觀、その安んずる所を察すれば、人焉んぞ廋（かく）さんや。人焉んぞ廋さんや。
  - 論語・為政第2の10(42頁)
  - 孔子の人物観察法は視・觀・察の三つによる。まず第一に、外面に現れた行為の善悪正邪を視る。第二に、行為の動機は何であるかを觀きわめる。第三に、その人の行為の落ち着くところ、その人は何に満足しているかを察知すれば、必ずその人の真の性質が明らかになるもので、その人が隠しても隠しきれぬものでない。・・・その安んじるところが正しい人でなければ、本当に正しい人である保証はない。
    - 渋沢48頁

# 忠恕。生涯行うべきこと。

- 子貢問いて曰く、一言にして以て終身之を行ふ可き者有りや、と。子曰く、其れ恕か、己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ、と。
  - 衛靈公第15の24 (365頁)
  - 子貢が質問した。「生涯、行ふべきものを一文字で表せましょうか」と。老先生はお答えになられた。「それは思いやり（恕）だな。自分が他人から受けたくないことは、他人にもしないことだ」と。
    - 加地139頁
- 子曰く、参や、吾が道一以てこれを貫くと。曾子曰く、唯と。子出づ。門人問うて曰く、何の謂ぞやと。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ。
  - 論語・里仁第4の15 (89頁) ; 渋沢101頁

# 知略。忠恕の精神

- 知略がないと忠恕は実現できないが、知略があっても忠恕があるとはかぎらない。
  - 知とは知恵のことで、事物を観察して理非を判断する力をいう。この判断力がなければ、いかに忠恕の精神を行おうとしても、かえって他人に迷惑をかける。略は計略ではなく臨機応変の工夫である。
- 世の中、たいてい知略の一方に傾き、知略の原動力となる忠恕の精神を欠いている。
  - **渋沢103-104頁**

# 無欲速

- 子夏、莒父（きよふ）の宰と為り、政を問う。子曰く、速やかならんことを欲する無かれ。小利を見ること無かれ。速やかならんことを欲すれば則ち達せず。小利を見れば、則ち大事ならず、と。
  - **論語・子路第13の17（305頁）**
  - 子夏が莒父（魯君の直轄領）の地の長官となり赴任に際して政治の心構えをお尋ねした。老先生はこう教えられた。「成果を急がないことだ、目前の小利を求めないことだ。速く成果をと思うと、障害が現れ、目的に到達しない。小利に目がくらむと、大きな仕事が完成しない」と。

## 過而不改、是謂過矣

- 子曰く、過ちて改めず、是を過ちと謂う。
  - 論語・衛靈公第15の30（368頁）
  - 老先生の教え。過ちを犯したのに改めない。これが真の過ちである。

# 以直報怨、以德報徳

- 或ひと曰く、徳を以て怨みに報ゆるは、如何、と。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨みに報い、徳を以て徳に報いん、と。
- **論語・憲問第14の34 (340頁)**
- ある人が質問した。「仇への怨みに恩恵を与えて解決するというのはいかがでしょうか」と。老先生はこうお答えになられた。「それなら恩恵に対して何をもってお返しするのだ。怨みには、そのままの気持ちで、恩恵には恩恵を、ということだよ。」これにたいして『老子』第63章には「怨みに報ゆるに徳を以てす」がある。

# 水平な接し方

- 子曰く、詐を逆えず、不信を億らざるも、抑々亦先覚する者、是れ賢か。
  - 論語・憲問第14の31 (338頁)
  - 老先生の教え。[相手に対して] これは詐欺ではないかとはじめから邪推したりしないし、約束は守りますまいとはじめから推量したりしないが、どこか途中で、おかしいと先に察知できる者、それが賢人である。
- 子曰く、君子は諸を己に求め、小人は諸を人に求む。
  - 論語・衛靈公第15の21 (364頁)
- 子曰く、君子は言を以て人を挙げず。人を以て言を廃せず。
  - 論語・衛靈公第15の23 (364頁)